

『ごん狐』論—他者論的な観点から

大 貫 徹

When Hyoju saw the fox (called “Gon”) enter his kitchen in the final scene of the story, he shot a gun suddenly. Why did he fire abruptly? Because Hyoju mistook the fox for a thief. But he didn't need to fire, he had only to shoot it away. Objecting to Mr.Tando's opinion (*Japanese Literature* no.590), in this paper I will explain why Hyoju shot the fox so suddenly. Mr.Tando argues that Gon is entirely mistaken in believing that Hyoju's situation is very similar to his. And he remarks that this misunderstanding causes Hyoju to fire a gun at Gon. But it is not Gon's mistake but a one-way relationship between them that brings about a tragic scene. Gon gives a lot of gifts to Hyoju for making compensation for his mischief. But Hyoju isn't interested at all in what Gon is doing. There is a great difference between their concerns, which brings about a one-sided relationship. In this relationship Hyoju's behavior is beyond Gon's understanding. This is why Hyoju's shooting looks too unexpected for Gon.

1. 『ごん狐』の分かりづらさ

新美南吉 (1913-1943) の『ごん狐』(1932年)はいたって単純な物語である。いたずら狐である「ごん」が、いつものいたずらのつもりで、あるとき、兵十という男が苦心して捕まえたうなぎを川に放り投げようとして魚籠から盗んでしまう。その直後に、この兵十の母親が死ぬ。これを知って「ごん」は、自分がいたずらをしたばかりに兵十の母親は「あゝ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもひながら、死んだんだらう」⁽¹⁾と勝手に

思いこむ。その結果「ごん」は、兵十にその「償い」をしようと決心し、毎日、栗や松茸などの届け物をする。しかしすべて「ごん」の勝手な思いこみによるものだから、それが逆に兵十にとっては「ありがた迷惑」だったり、「おれあ、このごろ、とても、ふしぎなことがあるんだ」(13頁)と村人の加助に相談すると「そりやあ、神さまのしわざだぞ(略)まいにち神さまにお禮を言ふがい、よ」(14頁)と言われる始末である。そんなある日、いつものように「ごん」が兵十に届け物をしようとして兵十の家に入った瞬間、兵十に見つかってしまう。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいつたではありませんか。
こなひだうなぎをぬすみやがつたあのごん狐めが、またいたづらをしに來たな。(15頁)

そこで兵十は「納屋にかけてある火縄銃をとつて、火薬をつめ(略)足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとするごんを、ドンと」(同頁)撃つ。この弾に当たった「ごん」はばたきと倒れてしまう。だがそのとき、兵十は「ごん」が届け物をしてくれたことにはじめて気づく。

「おや。」と兵十は、びつくりしてごんに目を落しました。
「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは。」
ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまゝ、うなぎました。
兵十は、火縄銃をばたきと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出てゐました。(同頁)

これが『ごん狐』のすべてである。「ごん」の思いが兵十に通じたところで話は終わっているように思える。これを悲劇的な話と考えるかそれとも逆に(自分の死と引き替えに「思い」が通じたのだから)ハッピーエンドに終わる話と考えるかはそれほど重要なことではない。むしろ重要なことは、このきわめて短い話の中にどうにも理解できない点がいくつかあることだ。

たとえば兵十はたしかにこの狐が自分に届け物をしてくれたことは分かったとしても、その理由までは結局分からなかったのではないだろうか。「ごん」の視点から語っている「語り手」のおかげで、私たち読者は「ちよっ、

あんないたずらをしなけりやよかつた」(11頁)と「ごん」が呟いたことも、その結果「ごんは、うなぎのつぐなひに、まづ一つ、いゝことをしたと思ひました」(12頁)と考える「ごん」の思いも手に取るように分かる。しかし兵十には当然ながらそうしたことまでは分からない。それどころか、先にも触れたように、兵十にはこうした「ごん」の動きが逆に「ありがた迷惑」だったり、「とても、ふしぎなこと」であったりしていたのだから、そのようなことを想像するなどどうていできはしない。もちろん兵十もこの狐が「こないだうなぎをぬすみやがつた」狐であるということまでは認識していた。しかしうなぎの件と自分の母親との死が結びつくことなど想像の埒外である。ましてや「ごん」が兵十に「償い」をしようとしていることなど、兵十には思いも寄らぬことだろう。したがってどうしてこの狐はそのようなことをし続けたのか、これは謎として兵十の心に永久に残るのではないだろうか。加助が「神さまのしわざだぞ」と言ったように、もしかすると兵十は今でもこの狐が「いろんなものをめぐんで下さる」(14頁)神様の使いとでも思っているのかもしれない。

しかしこの物語の中でもっとも理解できないことは実はこのことではない。それは火縄銃による発砲である。ここでもう一度この話を振り返ってみよう。「ごん」はいたずらをしている。そのいたずらも、もちろん昨日今日始まったものではなく、以前からずっとやっていることであろう。そのため「ごん」もきわめて軽い気持ちで兵十にいたずらをしたと思われる。実際、物語の中でも「ちよいと、いたづらがしたくなつたのです」(8-9頁)と記されてある。しかしそれがいつもの軽いいたずらで終わらなくなってしまったのは、先にも触れたように「ごん」の勝手な思いこみの結果である。その思いこみを促したのは、『日本文学』(590号)で丹藤博文が言うとおりの「ごんは兵十を自分と同じ境遇になったと見なした」⁽²⁾からであろう。丹藤はさらに次のように言う。

ごんは兵十を自己化してとらえるという陥穽におちいつていたのである。他者を他者として、その他者性に目を開くことなく、兵十を「自分と同じ一人ぼっち」と認識してはばからなかった。そのように認識を曇らせてしまったのは、母の不在と孤独な境遇という状況であり、そこに悲劇の伏線はある。

⁽³⁾

こうした事態を丹藤は「他者の自己化」⁽⁴⁾と呼び、これこそが悲劇の根本要因であると主張する。簡単に言えば、「ごん」殺害は「ごん」自身に原因があると言うのである。しかし本当にそうだろうかというのが筆者の論点である。というのも、「ごん」と兵十との認識のずれなど、ある意味ではどこにでもある話と思うからである。実際、私たち自身も他人との間で似たようなことを毎日のように繰り返しているのではないだろうか。もちろん「ごん」のように悲劇的な最期を迎えることはまれである。しかしそれでも往々にしてそこには喜劇的な、時には悲劇的な事態が生じていることは誰でも経験していることだろう。さらに言えばこうした「認識のずれ」は物語に限らず、映画やドラマでも盛んに演じられている。たとえば70年代から80年代にかけて人気を博した松竹映画『男はつらいよ』などはその典型でなかろうか。渥美清扮する「寅さん」とはまさに「ごん」そのものではないのか。したがって、こうしたことは日常茶飯事のことであって、それをことさら「他者とのあり方」などと大仰に言うべきことではないのではないのか。

もちろん「ごん」の兵十への思いこみは尋常ではないと主張することはできよう。だからこそ兵十による殺害へと進んでいったと考えることも十分できるだろう。しかしそんな場合でも、いきなり火縄銃でズドンと撃つのではなく、たとえば棍棒か何かを振り回しながら「こらー」とでも叫んで「ごん」を脅しつければ済む話ではないだろうか。実際これまでも村人たちはこのようにしてこの狐を追っ払ってきたのではないだろうか。にもかかわらず兵十はいきなり銃で「ごん」を撃ってしまう。ということは、丹藤の主張とは逆に、むしろ兵十の方にこそこの殺害の原因があると考えべきではないだろうか。

ここで問題を整理してみよう。筆者が理解できないと考えている点は大きく言えば二点ある。第一に、兵十がどうして火縄銃を所有しているのかという点である。第二に、兵十がどうしていきなりそれを撃ってしまったのかという点である。言うまでもなく、火縄銃を所有していることとそれをいきなり発砲することとは必ずしも結びつかないからである。したがってここでは銃の「所有」とその「突然の使用」という二段階に分けて考えたいと思う。

2. 兵十の生業は何か

最初の点から考えてみたい。物語の中では「兵十は、立ちあがって、納屋にかけてある火縄銃をとつて、火薬をつめました」（15頁）とあるから、兵十は日常的に火縄銃を扱っていることが伺える。となると兵十は百姓ではないということになるだろう。かといって新兵衛のような鍛冶屋でもなさそうである。では兵十はいったい何を生業としているのであろうか。このとき、原『ごん狐』とでも言うべき『権狐』⁽⁵⁾の重要性が浮かび上がってくる。というのもこの作品のおかげで、兵十がもともとは獵師で今は山を下りて村で百姓をしているのではないかと推測することが可能となるからである。

『権狐』は新美南吉の原稿ノートとも言うべき「スパルタノート」に記されている。そのノートの中で「一九三一・一〇・四」と記された箇所はこの作品があり、しかもそこには「赤い鳥に投ず」と副題が付けられている。ということは、新美南吉全集第三巻の解題者によれば、南吉はこの作品をもとに「次に原稿用紙に書き、それを「赤い鳥」に投稿したと考えられる」⁽⁶⁾。しかしこの『権狐』と実際に「赤い鳥」に掲載された『ごん狐』との間にはかなりの異同がある。したがって先の解題者はここに「赤い鳥」主宰の鈴木三重吉の手がかなり入ったのではないかと推測する。しかしここではそれに関しては詳しく触れるつもりはない。とは言え、異同に関して、ひとつだけ触れたい点がある。それは冒頭部分である。というのも両者はそこで大きく異なっているからである。したがってまず以下に両方の冒頭箇所を引用し、その後、異同について論じたい。

まず『権狐』の冒頭箇所を引用する。

茂助と云ふお爺さんが、私達の小さかつた時、村にゐました。「茂助爺」と私達は呼んでゐました。茂助爺は、年をとつてゐて、仕事が出来ないから子守ばかりしてゐました。若衆倉の前の日溜で、私達はよく茂助爺と遊びました。（略）唯、茂助爺が、夏みかんの皮をむく時の手の大きかつた事だけ覚えてゐます。茂助爺は、若い時、獵師だつたさうです。私が、次にお話するのは、私が小さかつた時、若衆倉の前で、茂助爺からきいた話なんです。⁽⁷⁾

これに対し『ごん狐』の冒頭は以下のようなものである。

これは、私が小さいときに、村の茂平といふおぢいさんからきいたお話です。
(7頁)

『ごん狐』の冒頭と比べて『権狐』ではかなり詳しく「語り手」について触れている。その名前は茂助と言ひ、今は年老いて十分な仕事も出来ないので子守をしていること、さらには「夏みかんの皮をむく時の手の大きかつた」といった身体的特徴にまで言及している。これに対して『ごん狐』ではそうした点がすべて消去されており、語り手の存在などほとんど意味をなしていない。論文「新美南吉『権狐』論—『権狐』から『ごん狐』へ—」において、木村功は、こうした「語り手」の消失こそが鈴木三重吉の手によるものであり、しかもこうした改変によって「茂助爺から聞いた話の持っていた悪戯狐の反省譚という物語性が失われる代りに、孤独な権狐が「贖罪」を通して兵十に共生を求める新たな物語がテキストから浮かび上がってくる」⁽⁸⁾と主張する。実際、『権狐』の冒頭は「『権狐』がもともとは濃厚な地域性を背景に物語られた口承であったこと」⁽⁹⁾をはっきりと示している。しかもここには口承譚の語り手である「茂助爺」がもと猟師であったことまでも明記されている。とすれば老いた「茂助爺」が村で生活している中で幼い南吉たちに物語ったという原『権狐』は、「近代社会の中で生活の場を失っていった「猟師」の生活を背景とするものであった」⁽¹⁰⁾とする木村功の主張も十分に頷ける。つまり口承譚としての原『権狐』→「スパルタノート」所収の『権狐』→「赤い鳥」掲載の『ごん狐』へと、この物語が移行するにつれて、もと猟師の「茂助爺」が南吉たちに語った口承譚は、木村が言うように、「地域性を失う一方で、より普遍的な物語性を獲得して読者市場を流通する文学テキストに変換され」⁽¹¹⁾たのである。こうした変換の流れの中でテキストは必然的にある変容をこうむる。しかし『ごん狐』に限ってはその辺の変容が十分に整理されていないせいか、物語全体の統一性という点になると多少の齟齬が見られるように思われる。したがって木村が次のように述べるのもきわめて当然である。

「権狐」では(略)語り手の「猟師」としての「徴」が内容に明らかに認められるのに、「ごん狐」では、それらの「徴」が「猟師」を消されたことで全

く潜在化させられてしまっている。注意深い読者は、そここに内容上の矛盾を見出すであろうが、なぜそのような混乱がテキストに存在しているのか理解できなくなるのである。⁽¹²⁾

ということは、「兵十がどうして火縄銃を所有しているのか」という筆者の最初の疑問とは、木村の言う「内容上の矛盾」の典型ということになるだろう。もと猟師で今は村に住んでいるという設定でもともと創造された兵十は、本来ならばテキストの改変に従ってそれなりに修正されるべきであった。にもかかわらず、その辺の修正が十分になされなかったために『ごん狐』において兵十の生業がきわめて曖昧になってしまったのである。したがって本来的に村に定住している百姓ならば、棍棒などで「こらー」とやれば済むところを（猟師を出自とする）兵十はそうせずにいきなり火縄銃を手を取ったというわけである。いわば職業的な反射行為というところであろうか。しかしそれでも第二の疑問はまだ解決されてはいない。仮に「いきなりズドン」という場合でも、それで実際に撃とうという気はなく、単なる警告ということもあり得たであろう。しかし兵十はそうではなく「いきなりズドン」と相手を撃ってしまった。もちろん猟師としては、相手がたとえ狐のような小動物であっても撃ち殺すのが当然であるという説明も十分に可能であろう。先に述べた言葉で言えば、猟師のいわば職業的な反射行為ということに帰着できるかもしれない。しかしそれでも筆者にはこの「いきなりズドン」がどうしても理解できない。ここには兵十の職業とか性格とかを超えたある不可解さがあるように思える。そしてむしろ筆者はこの「いきなりズドン」にこそ、他者の「他者性」を見たいのである。

3. 他者としての兵十

兵十による火縄銃の発砲について論じる前に、まず「ごん」の行動から考えてみよう。「ごん」は自分の「償いたい」という思いが兵十に伝わることを望んでせつせと栗や松茸を届ける。ということは、この栗や松茸には「償い」というメッセージが付与されているということになる。しかし兵十はその意味を読み解くことができない。それどころか、最初の頃はそこに意味があることさえ認識できずに「とても、ふしぎなこと」と思うばかりである。しかし届け物が続くので、兵十はそこに何らかの意味があるのではないかと

考えるようになる。その結果「神さまのしわざ」という意味を隣人の助けを借りていわば無理矢理引っ張り出してくるのである。これは「ごん」からすれば大きな誤読である。しかし兵十がもう少し賢明であればそのような誤読をしなかったかという、それはそうではないだろう。というのもそこに「償い」という意味があることは兵十にとって思いもよらぬことだからだ。もちろん兵十ばかりではない。隣人の加助にしたって同様だろう。「ごん」と兵十たちとの間にはいわば共通のコードがないのだ。ところが「ごん」はこのことに気づかない。それどころか、自分の思いが相手に通じないのはあくまでもその方法や手順が悪いからだと考え、もっと頻繁に栗や松茸を届けるべきだと考えるのである。言うまでもなく、いくら届けても無理である。兵十にはそもそもそれを解説するすべがないからである。「ごん」と兵十とのこうした関係は、たとえてみれば、片思いにも似た一方通行的な関係に近いであろう。それも兵十からすれば恋愛の対象にはとうていなり得ないような相手からの熱い片思いなのである。まさに「ありがた迷惑」な片思いなのである。柄谷行人ならば、こうした関係をおそらく「非対称的な関係」と呼ぶだろう。柄谷は以下のように言う。

「教える－学ぶ」という非対称的な関係が、コミュニケーションの基礎的事態である。これはけっしてアブノーマルではない。(略)対話は、言語ゲームを共有しない者との間にのみある。そして、他者とは、自分と言語ゲームを共有しない者のことでなければならない。そのような他者との関係は非対称的である。⁽¹³⁾

柄谷はさらに「共通の規則をもたない他者とのコミュニケーション（交換）は、必ず「教える－学ぶ」あるいは「売る－買う」関係になる」⁽¹⁴⁾と付け加える。柄谷に倣って言えば、「ごん」はまさにこちらを向こうともしない兵十に必死になって何かを教えよう（売ろう）としている存在であり、これに対し、兵十はそこに何か学ぶ（買う）べきものがあることさえ認識していない存在なのである。となると、丹藤のように「悲劇的な事態はすでにごんの認識の仕方そのものに胚胎していた」⁽¹⁵⁾とは言えないのではないだろうか。というのも「ごん」の認識の仕方が間違っているから悲劇が生じたのではなく、あくまで「ごん」と兵十の関係がそうした事態を生じさせたと思われるべきだからである。先に筆者は「兵十の方にこそこの殺害の原因があ

ると考えるべきではないだろうか」と述べたが、それもここで訂正しよう。「ごん」とか兵十とかいうように、個々の存在に原因があるのではなく、あくまでも両者の関係にその原因があると考えたいのである。もちろん「ごん」の認識は間違っている。しかしそれは「ごん」が兵十をあまりに自分に引きつけてしまったという間違いではない。自分の思いが兵十に通じるのだと認識したところに間違いがあるのだ。言い換えれば二人には共通のコードがあるのだと認識したところに問題があるのだ。したがって、ここでは、「ごん」における「他者の自己化」について論じるのではなく、「ごん」と兵十との「非対称的な関係」について論じるべきなのである。

たしかに「他者の自己化」が大きな悲劇を生む場合もあるだろう。しかしそれはここで問題とすべきことではない。そこに共通のコードがありさえすれば、本来的には了解が得られると考えられるからだ。ところが「ごん」と兵十の関係はそうではない。話し合えば誤解が解けるというものではないのだ。ところが「ごん」はこのことをまったく認識していない。では「ごん」はそれをいつ認識したのか。それは言うまでもなく、兵十にいきなりズドンと撃たれたときである。「ごん」にとってはこの不意打ちは衝撃的なことである。どうして自分が撃たれるのか、「ごん」にはまったく分からないからである。実際「ごん」には撃たれる筋合いがないように思えるからである。いくら考えてもこれまで自分がしてきたこととの「釣り合い」が取れないように思われるからである。しかし「釣り合い」を考えること自体、自分と兵十の関係が非対称的であることを理解していないことの証左だ。というのも「釣り合い」とはあくまでも「ごん」から見た「釣り合い」に過ぎないからである。同様に「不意打ち」と判断するのもあくまでも「ごん」側からの判断に過ぎない。「自分と言語ゲームを共有しない者」(柄谷)である兵十とは、このように、「ごん」の一方的な価値判断が遠く及ばない存在なのである。これこそがまさに他者の他者たるゆえんなのである。

だが、逆に言えば、暴力を伴った「不意打ち」というような形でしか「他者」は現れないのではないだろうか。「他者」とはそれ自体として実体的にあるものではなく、ある関係のとき、ある状況において、いわば暴力的に現れるものではないだろうか。言い換えれば「他者」とはいわば事後的に見出されるものなのではないだろうか。私たちはいまから15年前の1992年のハローウィンの夜、アメリカのルイジアナ州バトン・ルージュにおいて日本人

の高校生服部剛丈君が殺害された事件を覚えている。⁽¹⁶⁾ どうして服部君が殺害されたかのか。当時のマスコミは英語力の問題であるとか異文化理解の問題であるとか、いろいろ書き立てたが、結局は分からず仕舞だったのではないだろうか。それもそのはず、服部君は交換留学生としてそれなりに英語力もあったし、異文化理解もそこそこにあったと思われるからである。さらに言えば加害者も普段は善良な地域住民のひとりであったと言う。ではどうしてこのようなことが生じたのか。もちろんハロウィンの仮装姿のまま近づいてくる、見慣れぬ外国人に対してこの加害者が過剰に反応したということはあるだろう。しかしどうしていきなり発砲したのだろうか。もちろんその前に「フリーズ」と言ったのに服部君は止まらなかったという話もある。しかし警告の発砲でも充分だったはずであるし、あるいは逆にドアに鍵をかけて家に閉じこもってしまうことだってできたはずである。にもかかわらず、この加害者は、兵十と同様、服部君を目がけて発砲してしまうのである。もちろん人種の問題がまったくなかったとは言えないだろう。しかしそれが大きな原因であるとも思えない。どうしてこの加害者は発砲してしまったのか。ここにはどんなに推理を重ねても決してたどり着けない地点があるように思われる。このとき、いわば事後的に現れてくるのが「他者」ということではないだろうか。服部君は両者の間に共通のコードがあると思い、加害者宅に近づく。おそらく、ハロウィンの夜だから、この程度は許されると考えたのであろう。しかし加害者はそのようなことを思いもつかない。服部君は親愛な思いで近づくが、加害者はあたかも本物の悪霊が来たかのように怯える。この結果、加害者は人間を撃つという意識もなく発砲したのかもしれない。これこそディスコミュニケーションの典型である。

しかし、逆に言えば、こうした事例は、コミュニケーションの場において本来あるべきはずの闘争や暴力を私たちがいかに隠蔽しているかを示していると言えないだろうか。実際、世界は暴力に満ちている。中東やアフリカばかりではなく、日常においても暴力はあふれている。しかし私たちは他者のいない平和な共同体的なコミュニケーションしか想定していないのではないだろうか。たとえば寅さんの世界がいかに牧歌的かは誰もが承知している。そこには暴力はない。こちらが心を開けば必ず相手も心を開いてくれるという友愛的コミュニケーションしか存在していない。しかしそのときそこには柄谷が言う意味での対話はない。あるのは「自分と同一の他者との対話」⁽¹⁷⁾

だけである。それでは多様な他者に包まれた世界の中で真に生きて行くことはできないのではないか。その意味では新美南吉は、童話という形にせよ、「他者」というものが本来持っている暴力性をきちんと描いたのは賞讃に値する。

ところが南吉はこの暴力的な「他者」を急に隠蔽してしまうのだ。

「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまゝ、うなづきました。

兵十は、火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ておりました。(15頁)

兵十は急に「ごん」に理解を示し始めるのである。これについてはすでに触れたように、いささか理解できない点がある。実際、「土間に栗が、かためておいてある」(15頁)のことが分かったとしても、どうしてこの狐が届けてくれたと分かるのであろうか。逆に栗を盗みに来たとも考えられるのではないだろうか。むしろこちらの方が普通の発想なのではないだろうか。ところが兵十はあたかもすべてを理解しているかのような態度を取るのである。そして、済まなかったというかのように兵十は「火縄銃をばたりと、とり落す」のである。センチメンタルとしか言いようのない結末である。南吉はその直前で「他者」というものの本質をきちんと描いたにもかかわらず、ここでは「他者」などあたかもいなかったかのように「ごん」と兵十の心の交流を描いてしまうのである。この場面はいかにも甘すぎるし、欺瞞に満ちている。ここにはどんなことがあっても最期には必ず「他人とは心が通じ合えるのだ」という牧歌的メッセージがあふれている。しかしここまで注意深く読んできた読者はけっして納得できないはずだ。というのも「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは」という形での心の結びつきはこれまでの物語内容から判断する限りとうていあり得ないからである。どうしてこのような結末になってしまったのであろうか。残念としか言いようがない。おそらく「童話」というジャンルの限界がそこにあるのではないかと想像するが、いまはそれについて触れる余裕はない。いずれこの問題については稿を改めて論じたいと思う。

注

- (1) 『ごん狐』からの引用は特に断らない限りすべて『校定 新美南吉全集 第三巻』（大日本図書・1980年）からである。この箇所はその11頁からの引用である。以下は煩雑さを避けるためにその頁数のみ本文中に記す。ただし旧字は現行のものに改めた。
- (2) 丹藤博文「他者を読む—高校における『ごんぎつね』の授業」（『日本文学』（日本文学協会編集・刊行、590号、2002年、8月号、56頁）
- (3) 同論文、57頁。
- (4) 同論文、55頁。
- (5) 『権狐』に関しては特に断らない限りすべて『校定 新美南吉全集 第十巻』（大日本図書、1981年）を参照した。
- (6) 『全集 第三巻』、21頁。
- (7) 『全集 第十巻』、649頁。ただし旧字は現行のものに改めた。
- (8) 木村功「新美南吉『権狐』論—『権狐』から『ごん狐』へ—」（岡山大学教育学部研究集録、111号、1999年）
- (9) 同論文。
- (10) 同論文。
- (11) 同論文。
- (12) 同論文。
- (13) 柄谷行人『探求Ⅰ』（講談社、1986年、8-9頁）なおゴチック体は原文のままである。
- (14) 同書、8頁。
- (15) 丹藤前掲論文、57頁。
- (16) この事件に関しては以下のサイトを参照した。
<http://fuji.u-shizuoka-ken.ac.jp/~kokusai/common/lecture/yoshi/yoshi.html>
- (17) 柄谷前掲書、8-9頁。